

# 東 欧 の 印 象

城 戸 一 夫

# 東 欧 の 印 象

城 戸 一 夫

## はじめに

東欧は、いま夏の盛りをようやく過ぎようとする頃であった。

近来にない暑さだとはいうものの、夏の日盛り、ひとたびリンデンやマロニエの葉の繁る樹陰に入れば、汗ばんだ体に涼気が走った。

短い夏の光の恵みを、貪欲に体いっぱいを受けとめようとしているのであろうか、人々は思い切り開放的であった。それは、明日はまた異郷の地に旅行く者の眼には、歴史と体制の厳しい刻印などどこにも見られない、ドナウやモルダウの流れのように、自由な屈託のない光景であった。

私たちは、8月15日から20日まで、ポーランドの古都トルーニで開催された「第2回ヨーロッパユネスコ・クラブ及びユネスコ協同学校会議」に、日本のオブザーバーとして参加した。参加者は、竹本忠雄氏（日本ユネスコ協会連盟事務局長）、横山十四男氏（東京教育大学文学部講師、同附属中学校教諭）及び私の3名である。

ワルシャワからパリへ向かわれた竹本氏と別れた私たち両名は、その後チェコスロヴァキア、ブルガリア、ユーゴスラヴィア及びハンガリーのそれぞれの首都を訪れた。

各都市での滞在は、せいぜい2ないし3日である。極めて限られたある側面において、短期間の滞在は異質の社会の理解を可能にするのであろうが、しかし異質文化の本質的理解には、それはあまりにも短かすぎる期間である。可能な限りでの文献・資料上での準備の上で出発したつもりではあるが、滞在中の異質なものに働らいた想像力は、あるいは偏見を増幅させる結果に終わっているかも知れない。

しかし、異質なるものへの想像力とは、いわゆる国際理解の基本であると私は考える。必要なことは、対象＝異質なるものへの主観的裁断・主観的没入ではなく、対象の客観化である。存在としての対象をまず容認し、対象との絶えざる緊張関係を持続すること、その上での対象への無限の想像力の飛翔こそ、対象との共存・対象への理解の基本的条件である。それはまた私たちが歴史的思考力と呼ぶものと同質の認識作用でもある。にもかかわらず、東欧滞在中、不幸にして払拭されず、あるいは増幅された偏見があるとすれば、それはひとえに日程の制限と私の認識能力の不足によるものである。

東欧について私たちはどのような概念を抱いているのであろうか。

歴史的・文化的概念としての東欧は、一義的には規定し難い複雑な概念である。またその地理的概念も、歴史的に絶えず変動している。しかし、今日の私たちが用いる政治的概念としての東欧は、極めて明確な内容を有している。言うまでもなく「共産圏」として概括される八ヶ国（北からポーランド、東ドイツ、チェコスロヴァキア、ハンガリー、ルーマニア、ユーゴスラヴィア、ブルガリア、アルバニア）から成る政治的世界である。

しかし私たちは、東欧＝「共産圏」という図式で、あまりにも単純に割り切りすぎてはいしないであろうか。東欧八ヶ国の面積は総計しても日本の3倍強、人口はそれぞれ1000万から3000万程度でいずれも狭く小さな国である。だが、各国が相隣接するこの狭小な地域には多くの民族が居住し、それぞれ異なった歴史・言語・宗教を有しているのである。

東欧の中心民族であるスラブ族は民族大移動期に居住地から移動拡散し、東・西・南スラブ族となった。このうち東スラブ族はロシア人となり、西スラブ族からは今日のポーランド人とチェコ人、南スラブ族からはユーゴ人とブルガリア人が分化した。一方東欧中部には、非スラブ族のハンガリー人（又はマジャール人）とルーマニア人（ラテン系）が進出し、スラブ世界は南北に分断されることとなった。その他に、原住民や旧征服民族、ユダヤ人等の少数民族を含んでいるのが、東欧のおおよその民族構成である。

10世紀頃からの東欧は、ヨーロッパの北部とオリエントの南部とに大別し得る。北部（ポーランド、チェコスロバキア、ハンガリー）は中世の神聖ローマ帝国から第二次大戦のナチス侵略に至るまで、ドイツ人のドラング＝ナッハ＝オステン（東方進出）に絶えず苦悩し、その結果ドイツ文化・カトリック（旧教）の強い影響下におかれてきた。一方南部（ユーゴスラヴィア・ルーマニア・ブルガリア）は、ビザンチン帝国、次いでトルコ民族の圧制に苦吟し続け、トルコ文化・オーソドックス（正教）とイスラム教を受容してきたのである。

このような東欧の南北への分化は、ローマ帝国とキリスト教の東西分裂に対応するものであったが、それはともかくここ1000年の東欧は、内に複雑な民族・領土問題をかかえ、外からは周辺強大勢力の圧迫に悩み続けなければならなかった。その勢力とは、あるいはビザンチンやオットーマン＝トルコの帝国であり、あるいはハプスブルクやロマノフの王朝であり、近くはナチズムやスターリニズムであった。

今日の社会主義体制下の東欧諸国内部や諸国家間には、一応民族や領土問題は表面化していない。しかしこれら諸問題の根本的要因は、戦後わずか30年足らずの改革の間に消滅しきったと考えることはできない。ソ連におけるネオ・スターリニズムの台頭と東欧諸国の自立化・多極化の動きは、政治的斉合性そのものをも突き崩しつつ、早晚これらの歴史的・現実的課題を表面化させるのではなかろうか。

### ワルシャワ——深き眼差し

街角で、オフィスで行き交うワルシャワの人々の、あの深い穏かな眼差し——それは同じスラブ民族でも、他の国の人々にはほとんど見られない神秘的な印象すら与えるものであった。それ

は幾世紀もの動乱に耐え、亡国の屈辱を忍び、厳しいレジスタンスを闘い抜いてきた民族の、いま歴史のひとつきを憩い、ほのかな自由を垣間見る眼差しでもあるのだろうか。

厚い雲をつき抜けてオケチェ空港に降り立つと、国内委員会の若い職員に出迎えられた。私たちに強い感動を与えたあの眼差しをもつ、最初の人物、K氏であった。

前夜宿泊したモスクワから約2時間の飛行である。モスクワでの滞在は極めて短いものであったが、その印象は決して良いものではなかった。ゴリーキー通りを距ててクレムリンに面するホテルは一流なのであろうが、そのサービスというより管理は、すこぶる官僚的であった。旅行の第一歩から秘かに期待していたものにお目にかかったという嗜虐的な満足感があった。

モスクワでの散策はクレムリンの周辺——赤の広場、グム百貨店、レーニン廟、悪趣味な建造物であるロシア正教の聖ワシリー寺院、モスクボレッキー橋からのモスクワ川とクレムリン河岸など——程度であったが、それだけで充分であった。私はあまりにもソルジェニツィンの眼でクレムリンを見つめていたのかも知れない。

クレムリン宮殿の赤い星のイリュミネーションも未だ消えやらぬ翌朝早く、モスクワのシェレメチェボ空港を発った。ワルシャワへの2時間は何とも気の重い旅であった。東京での陰しい無慈悲な眼差しから解放される間もなく、モスクワの威嚇する眼差しに、私たちは気が滅入っていた。モスクワのこの視線が東欧全土に及んでいたならば、私たちは嗜虐趣味ばかりでは精神の均衡は保たれなかったであろう。これが杞憂に過ぎないらしいということを悟ったのは、まず第一に、出迎えのK氏、それにポーランド滞在中の私たちの世話役のA嬢のあの眼差しと献身的な心遣いのおかげである。

ワルシャワでの滞在は、トルーニ、およびプラハへの出発までのそれぞれ半日程度という慌ただしいものであった。会う人毎に私たちの感動をかきたてるあの眼差しに秘められた意味は何なのだろうか。それはどこから生れているのだろうか、その秘密に少しでも触れようと私たちは精力的に歩き回ったものであった。

ポーランドという国名は「野の国」又は「農耕の地」を意味するが、その名の通り国土のほとんど全ては坦々と果しなく続く広野でおおわれている。こうした特異な地理的環境は、ポーランドが絶えず周辺諸民族、とりわけロシア人とドイツ人に翻弄される特異な歴史的宿命を生み出す大きな要因をなしている。《われら生きる限りポーランドは滅びず。とつ国の奪い去りしもの剣もて取りもどさん》(加藤雅彦氏訳)というポーランド国歌の一節は、侵略と分割、亡国と抵抗の歴史的宿命の中から生れた国民の悲願を物語ると言えよう。

第二次大戦の破壊から蘇生したワルシャワ市街は、そのほとんどがもはや過去の歴史を語りかけようとはしない近代都市になっているが、旧市場広場を中心とする一画はワルシャワの古い面影をよく止めている。この広場では、今なお辻楽師が古風な手風琴を奏でては、観光客や子供たちを集めており、中世的な雰囲気漂わせている周辺の黒ずんだ石造りの家々の前の通りでは、

画家たちが自分の絵を売っている。中には驚くほど大胆なアブストラクトもある。

広場に面したこの古い建物の一画に歴史博物館がある。この小さいがよく整理された博物館を一巡りする間に、想いは自ずとこの国のもつ重い歴史の意味に走る。あの眼差しの一つの意味は、この歴史が生み出した憂愁と悲願の象徴でもあるだろうか。

ポーランドはまた東欧第1のカトリック国家である。国民の90パーセントがカトリック教徒であり、その信仰は彼等の生活と精神の中に今なお強く生き続けている。西欧諸国のキリスト教が、とりわけ若い世代にとっては通過宗教となっている今日、社会主義国の中で、おそらくは今のキリスト教世界で最も敬虔な人々を見出したのは、これまた大きな感動であった。私たちは旧市場広場近くの聖ヨハネ教会や、ワルシャワ大学の筋向いに建つショパンの心臓を収めてあるという聖十字架教会を訪れたが、通りがかりの人々が、十代の子供たちを含めて、必らず教会の内に数歩入って跪き十字を切るのであった。私がこれまで訪れた西欧の大都市では、まずほとんど見かけない光景であった。そういえば、1966年ミエシュコ王の改宗以来のカトリック千年祭の様子が、日本でも報道されたことを思い出した。彼らの眼差しが秘めているものは、この敬虔な信仰の証でもあるだろうか。

教会と統一労働者党（共産党）との関係は、しかしながら決して平和なものではないようである。56年のゴムルカ復権と共にヴィシンスキー大司教も復帰し、一時的に和解が成立したが、今日のポーランド最大の外交課題であるオーデル＝ナイセ問題を契機に陰悪なものとなった。1966年のカトリック千年祭に際しても、両者の間に大きな軋轢があったようであるが、党と国民の大多数の支持を背景とする教会との関係は今後も微妙な変動を続けることであろう。ポーランドの将来に関しても、また社会主義と宗教との関係一般を考える上においても、注目すべき事態であると言えよう。

教会と並んで党が対策に苦慮しているのは知識人問題であるという。ワルシャワは東欧最大の文化都市であり、コペルニクスやショパンを生んだポーランドは、今なおあらゆる知的分野にわたって旺盛な活動を示している。ゴムルカ政権にとって知的・文化活動の自由の制限の問題は、まことに難題である。言論の自由に関する哲学者アダム＝シュワフ教授と党との間の論争はよく知られている事実であるが、それは再び統制が強化されつつ今日にもなお生きている、ポーランド人の知的・批判精神のあらわれであろう。あの眼差しは、ワルシャワ中央駅の近くに聳え立つ巨大な文化科学宮殿が象徴する統制と権威に対して毅然と向けられた知的なきらめきでもあるだろうか。

ポーランドにおけるユダヤ人問題も、彼らの眼差しの意味を探る上において無視できない。ポーランドには戦前300万近いユダヤ人居住者がおり、その数は東欧中ずばぬけて高いものであった。彼らは、戦時中ナチスによってアウシュヴィッツやゲッソーで虐殺されてその五分の一に減少、戦後はイスラエルやアメリカ大陸に移住して今は2,3万人程度と言われる。ユダヤ人の虐

殺はもちろんナチスの蛮行であるが、しかしカトリック国であるポーランド人たちのアンチ＝セミティズムは、このユダヤ人狩りに果して無関係であり得たであろうか。『灰とダイヤモンド』で知られるアンジェイフスキは、現代のポーランド文学を代表する作家の人であるが、別著『聖週間』において、彼はポーランド人のアンチ＝セミティズムとワルシャワ＝ゲッソーの地獄に送りこまれるユダヤ人に無力で冷淡なワルシャワ市民を、怒りをこめて告発している。

クラシンスキ宮殿やサスキ公園、ユダヤ人墓地に囲まれたかつてのゲッソーは、今その一隅にゲッソー記念広場を残すのみの平和なたたずまいを示している。だがこの平和な街並を行き交い記念広場にたたずむ人々の心に去来するものは何であろうか。彼らの心は、常に平穏であろうか。彼らの眼差しに時折横切る曇り、それは苦悩と逡巡の想いでもであろうか。今なお反ユダヤ人感情が根強いといわれるポーランド市民にとって、その苦渋は東欧の根強い民族問題を今だに解決し得ない歴史の宿命、いや人間の宿命に由来するものであろうか。

私たちが静かな深い眼差しから読み取り得たものは、このような、歴史の憂愁と悲願、敬虔な祈り、知的なきらめき、民族的苦渋であつたのである。

### トルーニ——コペルニクスと森の町

ワルシャワからヴィスワ川に沿って「野の国」を西へ約250キロ距てたところに、この静かな中世都市はたたずんでいる。途中には、遮ぎるものとてない広大な耕地が坦々と広がっている。遠くはトルコの軍隊の、近くはナチスや56年のソビエトの戦車隊の、侵略路となったのは、どのあたりなのであろうか。改めてこの国の苛酷な歴史を想い出さずにはいられなかった。

トルーニは人口約13万、農・林産物の集散地で、工業の一中心地でもある。13世紀にドイツ騎士団領となったが、そのこと自体、ポーランドとドイツとの複雑な関係の歴史の一端を担っている事を物語っていよう。コペルニクスの出身地として知られ、コペルニクス大学という古い大学がある。昨年は彼の生誕500年にあたり、盛大な記念行事が催されたそうである。今度の会議の開催地となったのも、これに因んだものであろう。

大学は街の中心部にその古い面影を止めているが、会場となったのは、郊外の広大な敷地と近代的な建築を誇る生物化学研究所である。会議での龍大な資料は、この後プラハやソフィア等で蒐集した文献類と一括して、ベオグラードから東京に船便で送ったのであるが、未だに到着しないために、残念ながら、会議の模様については、ここで詳しく申しあげることにはできない。

印象記風に一・二記しておけば、まず全体として会議は低調であったと言わなければならないであろう。ユネスコ本部から来られたグランダ夫人も嘆いておられたが、それは一つには、ヨーロッパ、とりわけ東欧圏でのユネスコ活動自体の低調さを反映したものであろうし、また国際理解教育がすでにかかなりの歴史を有するにも拘わらず、ヨーロッパにおいてもその原理・方法等が模索の段階を越えていないこと、その普及度も低いこと、また会議参加者からみる限り、すぐれた人材に乏しいこと、などによるものであろう。

東欧圏のイデオロギーがユネスコ活動にどのような規制と特色を与えているのか、ユネスコ理

念と社会主義のイデオロギーとの間に、現実にはどのような緊張関係があるのか、またいわゆる平和学・平和教育は、東欧圏においてどのような位置にあるのか、といった点は、具体的には判明しなかった。しかしこれらの点は、いずれ資料の到着次第別に論考すべき課題であると考えている。

低調という印象は、私の貧困な語学力に加えて、同時通訳のまずさによっても強調されたであろう。第三世界への理解を訴えるイタリアの若い代表と、竹本氏の二度のスピーチが、全体の低調さを、一とき破ったものとして記憶されるべきであろう。

トルーニでのホテルは、市の中心部に近いが、周辺は広い公園と森林に囲まれた閑静な場所にある。森こそ、まさにヨーロッパの原初的なイメージであり、ヨーロッパの故郷であるという。ゲルマン民族もスラブ民族も、森に抱かれ、森を切り拓き、森と共に生活してきた。都市の発達は、ヨーロッパ人の故郷としての森を否定することではなかった。人々は活動する都会、昼の世界の内に、憩の森、広大な夜の世界を保存し続けてきた。都市の秩序もまた、ヨーロッパの二元論の論理に従っているのである。

その森の公園で、私たちは時が経つのも忘れて、深更まで語り合ったものであった。

### ブラハ——カフカ・マニエリスム・ブラハの春

「カフカは絶望者ではない。証人なのだ。

カフカは革命家ではない。覚醒者なのだ。」(ロジェ＝ガロディ)

週末の夜のブラハは、まことに暗く静寂であった。この静寂が、目覚めた証人カフカの眼にうつった「呪われた都」ブラハなのであろうか。夏だというのに、黒づんだ石の家々は厚いカーテンを閉めきり、人通りもほとんどない。薄明るく光の漏れる窓の内側での人々の語らいは、ハブスブルク以来の忍従なのか、押しつぶされた《ブラハの春》への想いなのか……。

この日の午後、アンドレ＝マルローとの会見のためにパリに向う竹本氏とワルシャワで別れた私たち2人は、さながら言葉を喪失した旅人の如く、まことに心細い東欧の旅を続けたのであった。リュジネ空港からようやくの思いでホテルに辿りついた時には、すでに夜の11時を回っていた。

ブルダバ川（モルダウ川）右岸に面し、チエハ橋近くに立つこの超近代的な高層ホテルは、しかし私には願ってもない地域に位置していた。この一画こそまさにヨーロッパ最古の旧ユダヤ人街、カフカの生家や墓地のある街並なのだ。今、手元にクラウス＝ヴァーゲンバハの苦心の作であるカフカとその家族のブラハでの足跡を辿った地図がある。それによれば、私たちのホテルの玄関の筋向いの建物は、1907年以降のカフカの家族の住居跡であり、その左後は1914～5年のカフカ個人の部屋のあった建物である。彼の生家・墓地とも、それぞれ歩いて数分のところにある。

「カフカの世界と彼を囲繞する世界と彼の内なる世界とは、唯一無二の存在である」ともロジェ

＝ガロディは言っているが、とすれば、私は今まさに、彼を囲繞した世界に——彼の内なる世界に、とは言えないにしても——旅のひとつきの憩を求めることになるのである。

この旧ユダヤ人街は、旧市役所広場から西北にかけてブルダバ川にいたる一帯に存在したが、その面影は今ではいくつかのシナゴグ、旧ユダヤ人墓地、町役場（ラドニッツ）にしか求められない。この街にまつわる有名な話には人造人間「ゴーレム伝説」がある。また中世以来のボグロム（ユダヤ人の大量虐殺）の歴史を秘めた街でもあり、それは第二次大戦中、ナチスによって計画的により巨大な規模でこの国のユダヤ人に対して行なわれたのであった。

「ここでは昔から恐怖が住みついでおり、十度壊されてはその都度建て直されたどの家でも、死が絶えずドアをノックしていたのだ。」これはルスティックと並んで、戦後のチェコ文学の双壁をなすと言われるヴァイルの『星のある生活』の一節である。これはブラハを無台とするナチス支配下のユダヤ人の凄惨な状況を描いた作品で、ルスティックの代表作『少女カテジナのための祈り』、およびスターリン批判の契機となったベドナール『時間と分』と共に、『ブラハの春』前後によりやく刊行されたものである。しかし、ナチスによるユダヤ人虐殺については、これ以上触れる余裕がない。

よくブラハを「中世の町」というが、これはあまり正確な表現ではないように思う。

私たちは、一見して退役将校と思える案内役のR氏と共に、ホテルからマネサ橋を渡り、ブラハ城（フラチャニ宮殿）に入った。その中庭から奥に進んだところにある、ブラハで最も壮大な聖ヴィート大聖堂やフラチャニ宮殿をはじめ、宮殿周辺の古い民家などは、ゴシックやルネッサンス、バロック、ロココなど、西欧のあらゆる様式を取り入れた、あまり趣味のよからぬ混成体である。またブラハの町の建造物にはいたるところに奇怪な怪獣像があり、またあちこちに奇型的な彫像が立っている。その空間構成は不統一であり、その構図は不均斉である。無意味・奇形の姿態が氾濫し、幻想に満ち、躍動する運動美に溢れる。

ブラハは東欧諸国中最も西欧的でありながら、ルネッサンス文化の波及に著るしく遅れ、一方、新教と旧教との厳しい対立が展開し、30年戦争の危機に直面していた。この不安と緊張の積極的な形象化が美術史家ドヴォルジャークのいうマニエリスムを生み出したのであろうか。精神文化の危機をいち早く感じとり、ルネッサンスの完美の相を超克しようとするマニエリスムの精神が息づく町——それがブラハなのだ。そして今私たちが、これまで軽視されてきたマニエリスムの精神を新しく評価しようとしていることこそ、近代精神の終焉を目のあたりにみた私たちの精神文化の危機という時代状況に即応するものではなからうか。

王宮の一室のとある窓辺にもたれて、私は眼下の町並と豊かなモルダウの流れに、しばしうっとりとしていた。「百塔の町」とも言われるように、無数ともみえる尖塔が町のあちこちに聳え、真夏の太陽の白い光が、スラブの世界に輝いていた。

ふと気がつくと周りにいたドイツ人やアメリカ人の会話の中に、世界史の授業で懐かしい言葉



が耳に入ってくる。あっ、と思って案内役のR氏に確かめてみると、やはりそうであった。今私がもたれているこの窓こそ、1618年、ヨーロッパ中をまきこんだ大戦争の発端となった「プラハ王宮窓外放出事件」のその現場なのである。当時のボヘミア王フェルディナンドは熱心な旧教徒として、新教徒を苛酷に弾圧し続けたため、激昂した新教徒の代表は王の代官をこの窓から投げ出したのであり、それが導火線となって、ヨーロッパ初の国際戦争である30年戦争が勃発したのである。窓のすぐ下の市街を見下す広場では、ちょうど日曜日のせいであろう、軍楽隊がスメタナやドヴォルザークの演奏をしており、市民や観光客が、大勢耳を傾けていた。

プラハ城の北にあるベルヴェデーレ宮は、美しいルネッサンス式建築である。列柱のある回廊を裏へ回ると、ベルヴェデーレ（見張らし台）があり、手入れのよく行き届いたさして大きない瀟洒なフランス庭園がある。この見張らし台では、ケプラーが夜な夜な大空の星々と深遠な対話を交したことであろう。

この一帯はプラハでも最も快適な散策路である。城の西側にはロレッタ教会があり、典型的なバロックの悪趣味の彫刻が沢山陳列されている。これには辟易したが、次いで訪れたストラホフ図書館ではようやくバロックの圧迫から解放されて、精神の均衡を取り戻したことであった。このロマネスク様式の建物は、本来は修道院の図書館であったが、戦後の革命でチェコ文学図書館となり一般に解放されるようになったものである。しかし、今なお13万冊にのぼる古色蒼然たる蔵書が昔のままに保存されているありさまは、改めて知的探究の場としての修道院の意義を思い浮べさせるのであった。

プラハ城を中心とするブルダバ川左岸の丘陵地帯をおりて、カレル橋に出る。この橋からのフラチャニ城の眺望は最もプラハ的な光景である。しかしこの橋の両側の欄干の上に並んでいる30基の聖者達の巨大な彫像群は、またしても17世紀のバロックである。今、そのいくつかは矢倉を組まれて、丹念な修繕が施されているところであった。

カレル橋を渡ると旧市街である。ここは、ヨーロッパのあらゆる都市の中でも、恐らくは最も濃厚に歴史の軌跡をそのままに止めている一画であろう。橋を渡って東に進むと、まもなく大きな円形広場に出る。その中心には、早熟な宗教改革を展開しようとしたヤン＝フスの銅像が置かれ、周辺にはゴシックの巨大な旧市庁舎と、ティン教会がある。北の路地の一角にはカフカの生家の黄色い建物も一部のぞいている。

この旧市庁舎には塔があり、その西側には、古風な黄道十二宮の記号のついた大きな天文時計がある。この自動人形時計も15世紀以来のプラハの名物である。チェコ人は並外れた時計好きだということをそういえばどこかで続んだことがある。

市庁舎の望楼にのぼって、晴れ渡ったプラハの街並を、再び心ゆくまで展望してみた。ここからは左岸の王宮、教会群をはじめ、またさまざまな形をした塔、すぐ眼下のくすんだ茶色の屋根、黄色や黒ずんだ石造の建物や細い路地を一望することができる。けれども、今私が特に探し求めていたのは、青くかすむ丘陵の中のピラ＝ホラ（白山）であった。「窓外放出事件」の翌々

年、ハプスブルク王朝はボヘミアの反乱軍をこの「白山の戦い」で破り、以後第一次大戦の終了まで、チェコは徹底したゲルマン化の強制の下に、300年間の屈辱の日々を忍ばねばならないこととなったのであった。

白山への想いは、この望楼の南西側に見える5月1日橋（旧レギエ橋）のすぐ右岸にある国民劇場に連なる。この建物はチェコ人にとっては単なる劇場以上のもの、いわば聖地である。ゲルマン化の嵐の中でチェコ語すらしだいに奪われていったこの民族は、チェコ語の保存と民族意識の昂揚をめざして、田舎まわりの人形劇団をたくさん作った。また歌に愛国の情熱を託した地方の小学校教師（カントル）の役割も大きかった。「チェコ人は皆音楽家」という表現は、言葉を奪われ音楽に託した愛国の情熱を物語るものであろう。スメタナやドヴォルザーク、ヤナーチェクなど、いずれもこのような精神風土の中から生れた民族音楽家である。

国民劇場は、このような背景の中から、国民自らの劇場の建設を目的として、ハプスブルク当局のあらゆる妨害・干渉の中で、1850年大国民運動として、建設の第一歩が始まったのである。ボヘミアやモラヴィアの各地から、あらゆる階層の人々が各地の岩石や材木を携えて隊をなしてプラハに集まったのである。それから30年後に完成した劇場は、スメタナの『リブシェ』によって幕を切っておとした。第二次大戦後、ナチスの支配から解放された時、再開された国民劇場はやはりこの『リブシェ』によってスタートしたという。

旧市庁舎を南東に行くと、バーツラフ広場と呼ばれる大通りに出る。その突き当たりが国立博物館であるが、その建物に生々しく残っている弾痕は、チェコの今日の苦悩を物語っている。それは長いスターリニズム支配の後に、チェコ人がふと垣間見た《プラハの春》を、瞬時に厳寒の冬に引き戻した冷酷な記録なのだ。

東欧がスターリン批判、ポーランド政変、ハンガリー動乱によって激動を続けていた間、チェコは微動だにもせず「共産圏の優等生」として、伝統的工業力を誇る東欧一の経済力を背景に、安定した国力を維持していた。しかし戦後の過大な重工業投資は国民生活の向上をしだいに圧迫し、経済成長率は61年頃から急速に低下し始めた。経済学者オタ＝シツク教授を筆頭とする経済政策の批判や改革の動きは、これまでの東欧に見られない大胆な政治イデオロギーの自由化へとエスカレートしていった。ローザ＝ルクセンブルグがつとに予言していた事態が到来したのだ。チェコは今や従来のレーニン主義的・スターリン主義的モデルを放棄し、新しい社会主義、「人間の顔をした社会主義」、「リベラル・コミュニズム」の道を模索し始めた。ノヴォトニーが失脚し、ドゥプチェクが党第一書記に選出されると、党の「行動綱領」、チェコ文化人の「2千語宣言」が、相次いでソ連に対する公然とした果敢な挑戦を開始した。

このような事態の急激な進展に対して、68年8月20日深更、ソ連をはじめとするワルシャワ条約軍の戦車隊が突然チェコに侵入、短い《プラハの春》を瞬時に弊えさせたのであった。

ソ連の軍事介入の理由は未だに歴史の謎であり、推測の域を出ていない。しかし、「白山の戦い」によるボヘミア王国の滅亡が、異端者フスの伝統を恐れる西の隣国神聖ローマ帝国によるも

のであったように、《プラハの春》の終焉がドプチェクの異端＝「反革命」を恐れる東の隣国ソ連によるものであった、と言うことはできよう。

プラハ出立の前夜は、時折り雷鳴の交る篠つく驟雨であった。ホテルの窓に面するモルダウは青白い街燈に照らされて煙っていた。対岸に時折り市内電車が通る。しかし、奇妙に静寂であった。ただ、対岸の小高い丘に聳えるスターリン記念碑が、稲光に照し出されて、不気味であった。

夜は再びカフカの世界であった。この深更、プラハのどこかで、今なお目覚めた証人が、まだ起きているであろうか。

### ソフィア——イワン＝ヴァーゾフ

前夜来の豪雨は、バルカン半島一帯をも襲ったようであった。ソフィア上空の気象状況が悪く、私たちはリュジネ空港を2時間以上遅れて、ソフィアに向った。

まだ回復しきっていない天候の下、小型のプロペラ機でバルカン山脈を越えるというので、私たちはいささか緊張していた。ウィーン・ブダペスト付近上空はまだ厚い雲でおおわれていたが、やがてドナウ川が視界に現われ、高度3000メートルの低空で飛ぶ機上からは、まるで手にとるように、雨に洗われたバルカン山脈が眼下に広がってきた。石灰岩質の荒涼たる山地である。この不毛の山地の故に、バルカン諸国は、歴史的・文化的にヨーロッパから隔てられ、それとは異なったよりオリエンタ的な世界を形成することとなった。

しかし、機上から見る今日のバルカン山脈には、あたかもヨーロッパの末梢神経でもあるかのように、またロシアの伝統的南下政策の歴史的軌跡を描くかのように、岩山をぬって、道路が何本も走っている。山脈の谷間には、恐らくは名残のバラが芳香を漂わせていることであろう。

山脈を飛び越えると、やがて見わたす限り地平線の果まで咲き誇るヒマワリ畑が続く。ここはすでに豊穰な農業国、ブルガル＝「鋤を持つ人」の国、ドナウの彼方、バルカンの心臓部、ブルガリアである。

プラハから東へほぼ2時間、晴れ上ったソフィアの夏は、ことのほか熱気にほてっていた。

ソフィア市内には、プラハのように、とりたてて知的興奮を誘うものはない。レーニン広場を皮切りに、東欧式のツム百貨店をのぞき、権威主義そのものの共産党本部の巨大な建物はなるべく見ないようにして地下道にもぐると、両側にセルデカの遺跡がはめこまれている。再び地上に出ると、目の前のバルカン・ホテルの内庭には、セント＝ジョージ教会（ローマ時代の遺跡）が、あたかもフォロ＝ロマーノの一部を移したかのように、佻しく建っている。

党本部前の9月9日広場からソフィア大学に至る大通りはルスキー通りで、いわば歩行者天国の様相を示している。通りに面した国立考古博物館、国立美術館にしばし立ち入り、人民共和国の建設者ゲオルギ＝ディミトロフ廟を素通りして左に曲ると、燦然たる金色の大ドームをいただくアレクサンドル＝ネフスキー寺院が見える。19世紀の露土戦争で500年にわたるトルコの支配からブルガリアを解放したロシアの兵士を記念した正教寺院であるが、寺院の中の多数のイコン

はいずれも俗悪であり、全く失望した。

この寺院の近くにソフィア大学があるが、案内役の温厚な I 君は、この大学の経済学部学生である。

このようにソフィアは、むしろ黒海沿岸や「バラの谷」に向う観光客の通過地としての性格が強く、とり立てたものはない。しかし、そろそろ旅の疲れが出ている私たちには、休養日とするのには恰好の条件であった。ソフィアは「ガーデン＝シテイ」とも言われるように市内にはたくさん公園があり、また歩道自体公園の趣きをなしている。実にソフィアは文化都市というよりも、緑に恵まれた自然都市というべきであろう。私たちは、公園やテラスに入りこんでは、ささやかな夏のバカンスを楽しむことにした。

市内を歩く人々は、これまでの都市と比べて、はるかに東洋的な顔立ちの人々が多い。本来のブルガリア人はスラブ族ではなく、フン族の後裔であって、この少数民族とスラブ族との混血が今日のブルガリア人であると言われる。又、500年のトルコ支配の間の民族融合もあったであろう。私たちはこの街に来てはじめて物珍しげに振り向かれることも少なく、落ち着いた気分であった。

先ほどのネフスキー寺院の裏手の小さな公園に、イワン＝ヴァーゾフの墓碑がある。自然石にその名だけを刻んだ質素な墓である。その近くには彼の大きな銅像が立っている。彼に因んだものとしては、この他には、彼の名を冠した国立劇場と小さな博物館がある。

イワン＝ヴァーゾフは1850年に生まれた、ブルガリアを代表する文学者、国民詩人である。ソフィアの東にはば100キロ、バルカン山麓の小さな町ソーポト（現在のヴァーゾフグラード、トルコ名ビャーラ＝チェルクヴァ）の出身であり、代表作『軛の下で』は、14世紀末以来500年にわたるトルコの軛を打破しようとした、1876年の「4月蜂起」を、ヴィヴィッドに描いた作品である。21日間続いたこの民族独立運動は、トルコ軍による3万人余のブルガリア人の虐殺、300前後の町村の略奪・放火という悲惨な結末に終わった。しかし、トルコ軍による血なまぐさい蜂起鎮圧に対し、ヴィクトル＝ユゴー、ガリバルディ、ダーウィン、トルストイ、ドストエフスキー、ツルゲーネフをはじめとする当時の世界の進歩的世論の激しい抗議をうけ、翌年の露土戦争を経て、78年、ついにブルガリアの独立が回復されたのであった。

ヴァーゾフの出身地ソーポトは、4月蜂起をはじめとする南部の一群の蜂起をつぶさに経験した土地である。青年ヴァーゾフも自ら抵抗に加わり、独立後は親露・反露派の政争にまきこまれたり、地裁所長、文部大臣を歴任したりした。しかし政治分野での彼の活動はおおむね失敗であった。傷心の彼は、以後文筆活動に専念するが、こうした彼の遍歴やブルガリアでの文学上の地位は、ギベリン・ゲルフの政争にまきこまれたかつてのダンテを彷彿させはしないだろうか。

公園のベンチで、昼下りの憩いをむさぼりながら、私は『軛の下で』の英雄オグニャーノフのことや、はるか遠くビザンチンとこの国の交渉などについて、ぼんやりと考えていた。

ホテルからの眺望は、ある意味でソフィアを象徴していると言えよう。中心街との間は約5キロ離れているが、その間の大半は自由公園と呼ばれる、自然のままの大森林公園が占めている。その森林を越えて北西方に党本部の尖塔やネフスキー寺院のドームがひととき高く聳え立っている。南方には、美しいビトシヤ山が控えている。この山もまた激しい抵抗運動の志士たちの流血の場であったであろう。

出発の前夜はまたしても激しい雷雨であった。眼の前の森林公園の樹や枝が激しくゆれ、青葉が飛び散る。かなたの党本部の尖塔に、いつしか赤い星のネオンがとまり、党建設以来変ることのない忠実な親ノ関係を誇示するかのようにまたたいている。

この日は、異国で初めて迎えた私の誕生日であった。

### ベオグラード——アイコン幻想

シュルチン空港から市の中心部に入るにつれ、長い間抱いていた「白い町」ベオグラードのイメージは、無残に打ち壊されていった。

確かに、旧市街の代表的な繁華街クネズ＝ミハイロバ通り、美しい並木のある革命大通りやチトー通り、共和国広場、ボヘミアスタイルの古い通りスカダルリアなど、それなりの調和と特色をもった街並である。また、サバ川とドナウ川の合流する堤防の上にある、2000年の歴史のある旧城郭をもつカルメグダン公園、その対岸の建設中の新市街、ベオグラードのハイド＝パークと言われ、チトー官邸はじめ大・公使館、美しい住宅が並ぶトプチデル森林公園など、充分な都市美も窺い知ることができる。しかしこれだけでは、ヨーロッパのどこにでもある変哲のない近代都市にしかすぎないではないか。

いつの頃からか、私の内に形作られていった想像のベオグラードは、アイコンに彩られた荘厳な街であった。ビザンチン様式の寺院や修道院があちこちに重々しく建ち、その薄暗い堂内ではゆれる燈明にマリアのアイコンがほんのりと照らし出され、その下には、老女が修道士が跪いていなければならなかった。

幻想一般がそうであるように、ベオグラードのこのようなイメージにもたいした根拠があったわけではない。ユーゴ一帯がかってビザンチン領であったこと、とりわけベオグラード大学がオストログスキー教授の下に、ビザンチン史研究の一中心であることなどから、いつとはなしに育まれたイメージであった。

文献上では、セルビアには11～12世紀頃すでにアイコンが存在したとされている。クルト＝ブラッシュによれば、ここではアイコンの様式は聖画像ではなく、壁面の様式で表現されたという。アイコン芸術の最盛期は16世紀で、17世紀以降は農民の手による手工芸的なアイコンに転化した。ルーマニアにおけるようなガラス絵アイコンは出現しなかった。ついでに記せば、ブルガリアにおけるキリスト教芸術の最盛期は10～14世紀であるが、しかし当時のアイコン遺作品は少なく、その研究も未だ充分ではない。15～16世紀にかけては装飾的となり、レリーフの飾模様が多く用いられるようになった。私たちが、ソフィアのルスキー通りに面した小さなブルガリア正教寺院でみか

けたイコンは、まさにこの期の典型であったのである。いずれにしても、イコノクラスム（聖像崇拝論争）以前のイコンは、スラブ圏においては見出すべくもない。

1967年、東京でユーゴスラヴィア＝イコン展が開催されたが、その資料を今見返してみると、その大半はマケドニア各地の教会や修道院・博物館に散在しているもので、やはり時間をかけて丹念に歩き回るしかないようであった。私たちがベオグラードで見出したいくつかのイコンで、ともかく美術的価値のあると思われたのは、7月7日通りとマルコビカ通りの角にあるネオ・クラシック様式のカトリック寺院にあったマリア像と、10キロほど郊外の農村の小さな尼僧院であるラコビリア修道院のイコンだけであった。

私はせめてもの記念に、クネズ＝ミハイロバ通りの美術店で、模造イコンを1枚買ったのであった。

別の日、私たちはJ氏の案内で、ベオグラード郊外約20キロ南の地点にあるアバラ丘ヘドライブに行った。トプチデル森林公園を抜けるとゆるやかな丘陵地帯に入るが、その風光は、さしあたりユーゴのトスカナとも形容すべき明るいのどかな一帯であった。

丘の上の記念碑や麓の無名戦士の墓は、いずれもトルコ人やナチスに対するセルビアの民族運動の犠牲者を記念し、祀ったものである。同行のJ氏は、30代中頃だろうか、歯切れのよい生粋のセルビア人で、会話のはしばしにセルビア・ナショナリズムへの忠誠がほとばしり出る快男子であった。

このセルビア・ナショナリズムは、過去と現在のユーゴスラヴィアを理解する上に、極めて重要な鍵を提供するものであるが、しかしこの点について触れる余裕は、今はほとんどない。このナショナリズムは、ある場合には、北部クロアチア人に対するセルビア中心主義の表現であり、ある場合には、対独レジスタンスにおける「チェドック」としてチトーの卒いる「パルチザン」の中に発露した。それはまたユーゴのノーベル賞作家イヴォ＝アンドリッチの『ドリナの橋』が示すように16世紀以来、トルコの西欧侵入の防壁となって戦う祖国防衛軍として結晶し、今日では、この国固有の国内における経済上の南北格差の進行に刺激された偏狭な排他意識として現象している。

ユーゴスラヴィアとは「南スラブ族の国」の意である。しかしこの国について、その民族性とか文化的傾向といった一般的特色を指摘することは、決して容易なことではない。ユーゴスラヴィアという名が国名に冠せられるようになってからわずか45年しか経過していないという事実からも理解できるように、ユーゴを構成する諸民族はユーゴとしての共通の歴史を所有していないからである。

この国は複雑な構成と成立過程をもっている。それは東欧の民族問題、領土問題の縮図とも言えるものである。今日のユーゴは、6つの共和国（スロヴェニア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、セルビア、モンテネグロ、マケドニア）、5つの民族（セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人、マケドニア人、モンテネグロ人）、4つの言語（セルビア語、クロアチア

語、スロヴェニア語、マケドニア語)、3つの宗教(ギリシヤ正教、カトリック、イスラム教)、3つの文字(キリル文字、ラテン文字)から成っているという。

この複雑な歴史的混成体は、しかも絶えず相対立する2大勢力の接点におかれてきた。それはある時には、東ローマ(ビザンチン)帝国と西ローマ帝国、ビザンチン文化とカソリック文化であり、またキリスト教世界とイスラム教世界、またある時には、ハプスブルク王朝とオットーマン=トルコ帝国であった。この地は、広くはヨーロッパとオリエントとの接点であり、今日では共産圏と資本主義圏との対立点でもある。

この国の前途は、東欧のどの国にも増して、多難のようである。

〔後記〕

1. 本稿は、帝塚山学院大学国際理解研究所紀要「国際理解」第7号(1975・1)に掲載されたものに、一部加筆したものである。
2. 最終訪問地ブダペストについては、時間の都合上割愛した。
3. 本文記載中の、会議資料は、約8ヶ月ぶりに、4月末、無事到着した。会議については、この夏頃、スイスから送られてくる会議録の入手をまって、別稿を期したい。